

# 片道 50 日 薩摩藩の参勤交代ルート歩く

古地図を頼りにのんびり研究の旅 上野堯史

2020/1/30 付 日本経済新聞 朝刊

江戸時代、諸藩の大名は国元と江戸を約 1 年ごとに行き来する参勤交代を義務づけられていた。費用と手間をかけて立派な行列を仕立て、江戸から最も遠い薩摩藩では片道 2 カ月を超すことも多かった。私は約 250 年にわたる薩摩藩の記録 331 回をたどり、自ら街道を歩きながら約 20 年あまり研究してきた。

私の曾祖父は神主で、西南戦争に参戦した郷土でもあった。鹿児島に生まれ育った私は自然と日本史に興味をわき、高校教師になった。50 代だった 1990 年代半ば、地名辞典の編さんに参加したのが研究を始めたきっかけだ。

県内の地名を調べていると、藩の参勤交代が詳しく記録された資料をたくさん目にし



た。そこで素朴な疑問がわいた。江戸までおよそ 1400 キロ。いったい何日かかっていたのだろう。和暦を西暦に換算するのに苦労しつつ、データベースを作っていた。すると平均で片道 50~60 日かかっていたことが分かった。

鹿児島城を出発し、江戸まで片道 50~60 日かかった

江戸初期は海路が多い。天草、平戸と九州西岸を北上し、瀬戸内海を経て東海道に入るパターンが主流だった。江戸で将軍に拝謁するのは4月という決まりだったので、2～3月に荒れる玄界灘を大船団で通らなければならない。藩も困ったようで、1705年に4代藩主の島津吉貴が謁見を6月にするよう幕府に願い出ている。

江戸中期になって街道や宿場が整えられると陸路が増えてくる。熊本を通過して今の国道3号線沿いに九州西部を北上し、山陽道に入った。旅程日数はさほど短くならなかったが、船の風待ちのような足止めの懸念は減ったようだ。

最も時間がかかったのは片道161日で、1675年のことだ。2代藩主光久が江戸に向かう途上で病になり、療養で京都に滞在した。一方で最短は18日。江戸にいた3代綱貴が、鹿児島で病床の祖父光久を見舞うために急行した。小田原より馬廻を率いて日夜を継いだと記録され、大名行列ではなかったようだ。

街道を自分でも歩いてみたくなって、2000年に歩き始めた。鹿児島を出発し、宮崎県北部の細島港から瀬戸内海を経て東海道に入る「日向路」を選んだ。最も苦労したのが南九州のルートの特長だった。古地図を参考にするのだが、廃道やヤブの中もあり、現場で行ったり来たりする羽目になった。



休日ごとに少しずつ歩くので、1日約20キロののんびりした旅だ。それでも海路の部分を除くと計46日で東京に着いた。印象的だったのは東海道の歩きやすさだ。鹿児島

や宮崎は山道の急坂がとても多い。藩主も駕籠（かご）には乗っておられず、家臣と一緒に歩くこともあったのではなかろうか。

私は時計と歩数計をにらみながら歩いたが、江戸末期に西洋式時計を手に入れて正確に参勤交代を記録した藩主もいる。1854年の11代斉彬（なりあきら）だ。たいてい出発は午前4～6時、昼食休憩を挟み、午後4～6時まで1日40キロほど歩いた。江戸まで45日。それでも歩き慣れた当時の人々にとっては、ゆっくりした旅だったのではないだろうか。

格式を重んじる参勤交代では、宿や食事を含めて周到な準備が必要だったはずで、余裕のある日程を組んだのだろう。こうした研究は昨年11月、「薩摩藩の参観交替（さんきんこうたい）」（ラグーナ出版）にまとめて出版した。今年は自ら街道を歩いた記録を刊行する予定で、現役の教員だったときには忙しくて手が回らなかった歴史研究を楽しんでいる。

（うえの・たかふみ=元高校教諭）

以下は出版社ホームページより

## 薩摩藩の参観交替 —江戸まで何日かかったか—

四六判(128×188 ミリ)

114 頁

定価 (本体 1800 円+税)

ISBN 978-4-904380-78-9 C3021

2019 年 11 月 16 日発行

insert

「薩摩藩の参観交替 —江戸まで何日かかったか—」

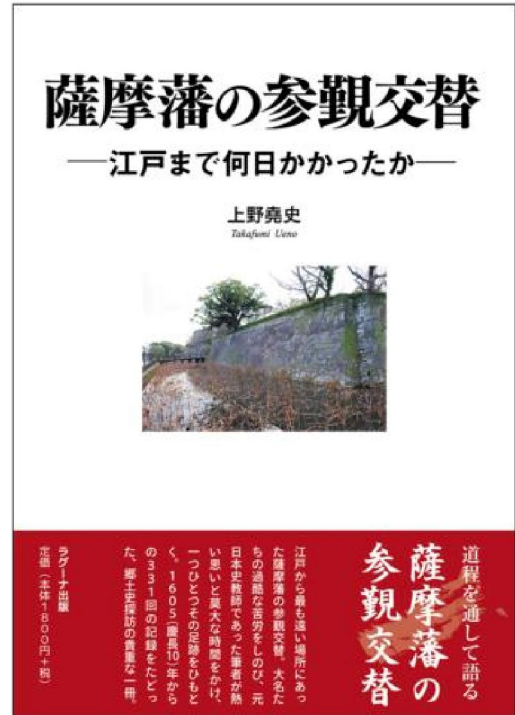
定価 (本体 1800 円+税)

在庫僅少

お問い合わせください

道程を通して語る薩摩藩の参観交替

江戸の政治・経済・文化の発展を促した、参観交替の実態に迫る!



著者

上野 堯史(うえの たかふみ)

1942年生まれ。鹿児島県立甲南高等学校、熊本大学法文学部史学科国史学専攻卒業。

1965年県立川辺高等学校教諭となり、以後鹿屋・甲陵・大島・国分の各高等学校を経て、

1992年県立武岡台養護学校、1998年県立鹿児島聾学校教諭を務める。

2002年に退職後、2003年10月～2004年3月鹿児島高専非常勤講師。

主な著書に「鹿児島士人名抄録」（高城書房、2005年）、「薩軍城山帰還路調査」（共著、薩軍城山帰還路調査会編、南方新社、2010年）など。

## まえがき（本文より）

江戸幕府による参観交替制度の成立は、1635（寛永12）年の「武家諸法度」によるとされる。私は、以前から参観交替制度に興味を持っていたが、制度に伴う礼式などの実相を研究する意図はなく、主に興味があったのは「薩摩藩は江戸まで何日かかったか」であった。参観交替の成立に関する研究は数多くあるが、日数に着目した研究は一つもなく、私はぜひその研究に取り組みたいと考えた。

私が研究資料として主に用いたのは、鹿児島県史料「旧記雑録」である。その中の記録は、単に出発・到着の事実のみを記しただけのものもあり、全ての記録が旅程期間の日付、宿泊地等を正確に記してあるわけではない。本書中で参観実例として挙げざるを得なかったのが、19世紀幕末の島津斉彬の参観の旅であったのはいささか残念である。17・18世紀に、より詳細な記録があったらよかったのだが。

もっとも最初の研究課題は日数計算ではなく、まず「参観交替とは何か」「それは何年に始まったのか」を特定することであった。特に、何をもって参観交替の成立とするのかを考究した。一般的には、「江戸と一年交替に往復する、妻子を常住させる」とするが、それは同時に始まってはいないし、参観交替に伴う礼式も段階的に整えられたようである。

ところで、本書では「参勤交代」ではなく、「参観交替」と表記してある。大名が江戸に赴くのは、記録に「述職」とあるように、将軍に謁見して自分が任命された藩の実情を報告するためである。江戸に着いた大名は、直ちに到着した旨を報告する。これを受けて、幕府は老中を藩邸に派遣し慰労する。後日登城の命が下る。そして大名が将軍に謁見する。このような礼式の意味も込めて、私は「参勤交代」ではなく「参観交替」とした。

本書は、私が2007（平成19）年に作成した「薩摩藩の参観交替」を改訂したものである。本書が今後の諸研究の一助となれば幸いである。

## 目次

### まえがき

1. 参観交替全記録（含む非参観交替記録）
2. 参観交替の成立
3. 参観交替の経路
  - 3.1 海上路
  - 3.2 陸路
4. 経路の利用実態

- 4.1 西海路の経路
- 4.2 日向路の経路
- 4.3 九州路の経路
- 5. 参観交替の規則
  - 5.1 参観交替の時期について
  - 5.2 参観交替の時期の変更
  - 5.3 上米制度による参観交替の時期の変更
  - 5.4 参観交替の供揃え
  - 5.5 参観交替の礼式
  - 5.6 参観交替は3代です
- 6. 参観交替にかかった日数
  - 6.1 参観全表
  - 6.2 下国全表
  - 6.3 参観・下国両表のまとめ
    - 6.3.1 参観
    - 6.3.2 下国
  - 6.4 参観交替の免除の場合
  - 6.5 参観交替の終わり
- 7. 参観の実例(島津斉彬)
- 8. 藩士の往還
- 9. 宿駅の利用状況
- 10. まとめ
  - 10.1 参観交替について分かったこと
  - 10.2 未解決の課題
  - 10.3 まとめの最後に
- 附録資料
  - 歴代薩摩藩主の記録
  - 時刻と方角
  - 東海道五十三次里程表
  - あとがき

insert	
--------	--